ISSN　1344―8366

『古代アメリカ』　*América Antigua*

第 24 号，2021 年，抜刷（pp.113-117）

＜書評＞

鈴木真太郎著
『古代マヤ文明―栄華と衰亡の3000 年』

千葉裕太（南山大学）

Suzuki, Shintaro,
Ancient Maya Civilization: Three Millennia of Prosperity and Decline

Yuta Chiba（Nanzan University）

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』24, 2021, pp.113-117

＜書評＞

鈴木真太郎著

『古代マヤ文明―栄華と衰亡の 3000 年』

東京：中央公論新社　2020 年
304 頁、960 円＋税

千葉裕太
（南山大学）

１．はじめに

本書は、石田栄一郎『マヤ文明―世界史に残る謎』［1967 年 中央公論新書］以来 50 余年を経て進展してきた古代マヤ文明研究を扱った概説書である。「まえがき」によれば、古代マヤ文明の一般的な知識を把握できることと同時に、教科書的にならず、また堅くならず、古代マヤ文明の街や人をめぐる多くの物語を紹介し、古代文明の謎を解き明かすことを目指して書かれている。同時に、著者の専門である考古人骨研究を取り扱い、近年の古代マヤ研究における斬新な知見を紹介しており、それが本書の特徴となっている。

２．本書の構成

本書の構成は以下の通りである。

序章　マヤ文明研究の歴史
第 1 章　考古学と形質人類学―バイオアーキオロジーの誕生
第 2 章　南部周縁地―グアテマラ南海岸地方、エル・サルバドル、ホンジュラス
第 3 章　人は動く―移民動態の研究
第 4 章　グアテマラ高地、マヤ王国の終焉
第 5 章　古代の食卓―マヤご飯
第 6 章　ペテン地方―密林に眠る神聖王の群雄活劇
第 7 章　古代マヤにおける戦争
第 8 章　灼熱のユカタン半島を行く
第 9 章　肉体は文化を語る

序章は「マヤ文明研究の歴史」として、16 世紀のバルトロメ・デ・ラス・カサスから、19 世紀のアメリカ合衆国の様々な大学によるものまで研究史を世紀ごとに簡潔に紹介している。

第 1 章から第 9 章について、本書評ではあえてコラムと、偶数章と、奇数章に分けてみていきたい。本書は、知識を補完するコラムと、概説的な偶数章、考古人骨研究に関する奇数章に分けられるからである。

第 1 章末のコラム 1 では、マヤ考古学界でおおむね受け入れられている、パレオ・インディアン期から後古典期までの 5 つの時代区分を紹介しており、次章以降の理解を助けている。第 2 章末のコラム 2 では、非マヤ系のレンカ文化を紹介している。第 4 章末のコラム 3 ではカミナルフユの遺跡保存と、文化資源としてのその活用の難しさを紹介し、考古学から得られた知見は広く市井の人々に伝えられていくべき、という著者の意見が述べられている。第 6 章末のコラム 4 ではマヤの暦とマヤ文字を紹介し、マヤ研究において石碑が判読可能な史料へと変わってきていることを、続くコラム 5 では、近年導入されている LiDAR 測量を紹介し、めざましく発展している近年の考古学のあり方を伝えている。第 8 章末のコラム 6 では、12000 年から 13000 年前の少女、ナイアの遺骨が紹介され、著者の専門である考古人骨研究分野の知見が記されている。

偶数章は、第 2 章は南部周縁地、第 4 章はグアテマラ高地、第 6 章はペテン地方、第 8 章はユカタン半島と地域ごとに分け、通史を概説している。それぞれの章において、テオティワカン他、メキシコ中央高原との関係についても触れられている。

奇数章は、本書の特徴が明確に表れている章であり、以下に詳しく取り上げる。

３．本書の特徴

本書の何より特筆すべき点は奇数章に記された、著者の専門とする考古人骨研究に関する部分である。ゆえに本書の特徴として、以下に奇数章の概要を紹介する。

第 1 章では、古人骨研究から古代マヤ文明を研究するための理論的枠組みとして、バイオアーキオロジーの歴史と基礎が簡潔に紹介されている。かつて考古学では、人骨資料はしばしば考古コンテクストが割愛されてしまうことがあった。しかしバイオアーキオロジーの提唱により、人骨資料もまた、考古学における資料としての価値が見直されるようになった。一定の運動が一定の期間以上反復されれば、骨格上の形質に影響を与えるため、人骨はいわば「加工品」であるという。著者は「古人骨は物質文化であり、考古遺物と捉えるべき」という考えを示している［p.18］。その一方で、バイオアーキオロジーでは古人骨を世帯という人間集団にまとめ、世帯の集合体として国の動態をも推察するが、古人骨の集成は古代人の集団ではないとも筆者は述べる。古人骨はその「個人」が生きた社会、文化、時代を反映する非常に強い考古情報を含むと述べている。

第 3 章では、同位体を用いた移民動態研究を取り上げている。章の前半では同位体を用いたアプローチが紹介されている。同位体分析の基礎知識がおさえられるよう要点が簡潔にまとめられており、後半の古代都市コパンの事例を読むための、読者の理解の支えとなっている。事例では同位体分析によりもたらされた新たな発見や、移民動態に関する様々な所見が示されている。

第 5 章では、トウモロコシの調理技術であるニシュタマルを紹介したうえで、グアテマラ南海岸地方の古人骨鑑定結果を紹介している。レイノサとシン・カベサスの古人骨群の、虫歯の罹患率、歯の損耗具合、生存時最大身長を比較し、ニシュタマル技術の有無が両者の差異を引き起こした可能性を指摘している。

第 7 章では、骨に残された傷や、骨学的データを踏まえて古代マヤにおける戦争を議論している。チャルチュアパ遺跡、エル・トラピチェ地区の先行研究から得られた「捕虜と戦争」という基本的な論理を組み立てる方

法論を、グアテマラ南海岸の実例に当てはめ、出土コンテクスト、骨学的に得られたライフデータ、出土時の体位、死亡前後に受けた暴力を鑑定することで、戦争を考察している。

第 9 章は、文化的肉体変工に関して、特に歯牙装飾と頭蓋変形を扱っている。考古人骨研究における記録工程を紹介し、歯牙装飾と頭蓋変形それぞれの実態について「施術者は誰か」「施術技法」「施術時期」の 3 点を記述し、さらに時代ごとの展開について述べている。

４．本書の評価

本書評の筆者はメソアメリカを中心に、人類の石の利用について研究しており、マヤ文明や考古人骨の専門家ではない。ゆえに、本書評では、1) マヤ文明に興味を持つ一読者として、2) メソアメリカに関する授業の担当者として、3) 他分野の研究者としての評価を述べたい。

4-1. マヤ文明に興味を持つ一読者として

いわゆる歴史の概説書は、一冊を通して単純に時代を追っていくものが多く、よく言えばわかりやすいが、読んでいてマンネリしやすい。先に述べた通り本書は概説的な偶数章の間に、著者の専門である考古人骨研究の知見が挟まれることで、「まえがき」で著者が述べている通り、まさに「ワクワクの火」を灯しながら、勢いに任せて一挙に読んでしまえる良書である。主に偶数章末に置かれているコラムもまた秀逸で、1 章読み上げた満足感のあとに、さらに楽しみがついてくる。著者の文調もまた、丁寧でありながら語りかける、問いかけるようなところもあり、早く続きが読みたい、もっとこの著者の文章を読みたいと感じさせてくれる。

惜しむらくは、年表の欠如である。概説部分である偶数章が地域ごとに分けられていることで、時代の縦の流れがつかみやすい一方、横のつながりを把握しにくい。また、偶数章の頭にはそこで扱う地域の遺跡分布図が載っているが、章をまたいだときに各都市の位置関係がつかみにくい。目次後の地図とは別に、マヤ地域全体のもう少し詳細な地図があると、マヤの全体像をより把握しやすかったように思われる。

4-2. メソアメリカに関する授業の担当者として

おそらく著者は教科書をつくるつもりで本書を執筆したわけではないだろう。しかし、本書評を読む方の中には、教科書としてどうかと検討される方もいるのではないかと思い、この視点で評価をしてみたい。

マヤ文明概論のような授業があるとすれば、本書は教科書としても良書と言えるだろう。偶数章を用いることで、マヤを地域ごとに分けて各地域の通史をわかりやすく押さえることができる。各章の長さも冗長すぎることはなく、もちろん浅すぎることはない。年表や地図についても、教員が補填資料を用意すれば十分である。

ただし、マヤ文明だけを扱う授業というのは、少なくとも国内では考えにくく、あってもごくわずかであろう。ラテンアメリカを先スペイン期から現代まで扱うような授業では、マヤ文明がテーマとなる回はせいぜい 2〜3 回ではないだろうか。それでは学生に教科書として用意してもらうには厳しい。本書を読了後、そういえば人身供儀に関する記述はほとんどなかったことに気づいた。球技についても取り扱われていない。メソアメリカに広がるさまざまな文化要素を紹介する部分がなかったことに気づく。それゆえに、マヤ文明が、まるでメソアメリカとは別個の一文明のような印象を与えてしまっていた。メソアメリカ全体を浅くとも広くおさえておくような章が早い段階で書かれていれば、より読者の理解を促し、教科書としても使いやすくなったであろう。

一方で、本書のコラム 3 に書かれている遺跡保存と文化資源としての活用の難しさは、考古学に携わる者と

してはぜひ学生にも伝えたいことであろう。受講生の数によっては、このコラムを学生とともに読みながら、ともにディスカッションするようなアクティブな授業も可能である。またコラム 4 にあるマヤの暦とマヤ文字は、学生にとっても実に興味深く読める部分であろう。筆者は、ラテンアメリカの歴史と文化を扱う授業を担当しており、特に先スペイン期を扱っている。各回の最後には、その回のテーマに関する良書を 5 分程度で数冊ずつ紹介している。当然マヤについて扱う回もあるわけだが、参考書の一つとして、本書を学生たちに紹介することを決めた。960 円+税という価格もまた絶妙である。

4-3. 他分野の研究者として

本書は、古代マヤ文明に限れば、広くわかりやすく書かれている良書である。古代マヤ文明について豊富な最新の情報が新書サイズに納められており、必読の一書と言えるだろう。特に、メソアメリカを研究地域としながらもマヤや考古人骨を専門としていない研究者にとっては、マヤの概要について偶数章で自分の知識を確認しながら、奇数章では考古人骨に関わる最新の知見に触れることができるのである。

しかし考古人骨を「加工品」と呼ぶことには違和感があった。意図的な文化的肉体変工はまさしく「加工」であるが、一定の反復運動により骨格上の形質が影響を受けてしまうことも、目的のために手を加えることを意味する「加工」という言葉で表せるものだろうか。もちろん考古人骨を考古遺物と捉える考えには同意する。

また随所にみられるテオティワカンをめぐる記述にはもう少し注意が払われるべきではなかったか。たしかにテオティワカンはメソアメリカの広い範囲にその影響を残している。マヤを語る上でも、テオティワカンの存在について触れないわけにはいかないだろう。しかしマヤとテオティワカンのつながりについては、より詳しい情報が書かれてもよかったのではないか。本書ではパチューカ産緑色黒曜石や、テオティワカン的な劇場型香炉について第 2 章などで触れられているが、その交流がエリート間交流だったのか、庶民まで含まれるような交流だったのかなどは言及されていない。議論され続けていることではあるが、中央公論新書としては 50 余年ぶりで最新の考古学の知見を紹介する本書だからこそ、現在学界で述べられている考えをぜひ記述しておくべきではなかっただろうか。また、オルメカとの連続性、不連続性や、他の地域の諸都市との交流、中間領域についてなど、もう少し広く取り上げることができれば、さらに理解が進んだのではないだろうか。

加えて本書には「（…）と面白い説が提示されている」「（…）というのである」といった書かれ方がなされた箇所が多数ある［p.36 など］。ではそれは誰の説なのかと前後を読んでも書かれていない。当然巻末にはたくさんの「主要参考文献」が列挙されているので、そのどれかなのであろう。しかしいざ、より詳細な情報を得るために出典をあたろうと思っても、非常に難儀する。一方で、著者名と出版年がその都度かっこ書きされていると、一般の読者にとっては読みにくくなってしまう。これは「ワクワクの火」を重視した著者の意図なのであろう。とはいえ「もし詳細なデータに興味を持たれた方があれば巻末の参考文献を参照していただければ幸いである」［p.133］という記述もあるだけに、そこにアクセスしにくいという点は、研究者としては残念であった。

４．おわりに

いくつか気になる部分はあったものの、繰り返し上述している通り、本書が古代マヤ文明を知るための良書であることは疑いない。とくに近年、国内の学会の論文や研究報告等でも、考古人骨や同位体を扱う研究が増えてきている。別の専門分野を持つ研究者だが、考古人骨や同位体に関する研究報告ももっと理解できるようになりたいと思われている研究者の方は、すぐにでも本書を入手し、一挙に読み上げてほしい。本書が、その胸の

内に燃える「ワクワクの火」に、薪を添えてくれるであろう。

原稿受領日　2021 年 8 月 31 日
原稿採択決定日　2021 年 9 月 22 日